

尼崎の森中央緑地における鳥類の生息状況

田中良典・谷山竜一・水野竜佑・江原共百生・加瀬雄大（環境学園専門学校）

【緒言】

兵庫県尼崎南部の埋立地に創出された「尼崎の森中央緑地」（以下、中央緑地）では、大阪臨海部の自然環境の再生をはかり、背後に広がる六甲山・北摂山系などの内陸の生態系とつながる広域拠点となる森を目指している。ここでは「鳥類による種子散布型の森づくり」を進めているが、鳥の利用実態の情報は決して多くない。本研究では、植生の異なるエリアごとに鳥類群集も異なると仮説を立て、調査を行った。加えて日本全国のスズメが減少傾向にあると報告されている(三上 2009)ことから、中央緑地での現状を把握するためにスズメ調査を行った。

【方法】

鳥類調査は、2015年6月30日から11月27日の間の21日間、高木区・芝生区・低木区に設けた調査ルート(130m)を10分で歩き、確認された鳥の種名・確認位置を調査用紙と地図に記録した。種名は目視と鳴き声により現場で同定した。スズメ調査は10月9日から11月30日の間に6日、低木区でのみ行った。その際、おおよその群れサイズ・位置・行動を観察するとともに、捕食者に対するスズメの反応を記録した。

【結果】

調査で確認した3区合わせての合計個体数は3,160羽となった(個体数割合:スズメ72%、ドバト7%、ヒヨドリ6%)。各区の個体数は低木区が2,428羽と最も多く、次いで高木区が698羽、芝生区が34羽であった。種数は低木で21種、高木で20種、芝生で8種となった。各区で個体数が多かった種は、高木区でドバト(206羽)とヒヨドリ(184羽)、芝生区でハクセキレイ(13羽)、低木区でスズメ(2,214羽)であった。特にスズメは低木区の中での個体数割合が91%と大多数を占めていた。低木区でのスズメ調査では、10月に約500羽、11月に約200羽確認された。低木区には、低木とイネ科草本の生えている場所と生えていない場所があったが、スズメの群れが多くいたのは前者であった。また猛禽類が中央緑地の上空に出現した際は、スズメが草本の中に隠れることが常であった。

【考察】

本研究により各区を利用する主な鳥は、低木区がスズメ、高木区がドバトとヒヨドリであり、芝生区は種数・個体数ともに少なく、鳥にほとんど利用されていないことがわかった。3区のうち個体数が最も多かったのが低木区であり、その多くがスズメであった。このことから、中央緑地の植生タイプの違いが鳥類群集に影響していることが示唆された。中央緑地では「鳥類による種子散布型の森」を目指しているが、樹木の種子散布に適している鳥はヒヨドリとの報告がある(唐沢 1978)。高木区ではヒヨドリが優占しており、今後も鳥による樹木(エノキ・ムクノキなど)の種子散布が期待できる。低木区ではスズメが優占しており、現状では鳥による樹木の種子散布は期待できない。それでもスズメがイネ科草本の生えた場所に多く分布していたことから、スズメが草本の種子散布に貢献している可能性はある。中央緑地での森づくりが始まって高木区が9年目、低木区が4年目である。今後もこのまま順調に進めば、低木区の低木が高木に成育して、樹木の種子散布に適したヒヨドリなどが増え、鳥類群集が変化すると予想される。一方、3区合わせての合計個体数が最も多かったスズメは、主に低木区に生息していた。今後も森づくりが進み、低木区が現在の高木区のような樹林に近づけば、草本類がなくなり、やがてスズメが好まない生息場所になると予想される。仮に中央緑地からスズメがいなくなれば、スズメの捕食者である猛禽類(チョウゲンボウ、オオタカなど)も利用しなくなる可能性がある。生物多様性の観点からみれば、低木区も重要な環境のひとつであろう。以上のことから、森づくりを進める中で、現在の高木区だけでなく低木区も残していくことが不可欠であり、その結果、中央緑地の生物多様性を高めることができると考えられる。